

《コミュニティ》

とすし
佐賀県鳥栖市「夢プラン21事業による小中学生の夢の実現」



とすし

佐賀県鳥栖市

「夢プラン21事業による小中学生の夢の実現」

コンペ方式で募った小中学生の「夢」を、地域、自治体が支援して実現させる子ども達から叶えたい夢を募集し、それを叶える過程で地域ぐるみで子育てを考える

「おとぎ話に出てくるようなお菓子の家があったらいいな」「冒険小説に出てくる秘密基地をつくってみたい」。誰しも子どもの頃に一度は思ったことのある夢ではないだろうか。

佐賀県鳥栖市では、子ども達から「夢」を募集し実現させようという取り組みが施策化されている。まさに「夢のような」話だが、夢を叶えるのは子ども達自身。地域の大人達のサポートを受けながら1年がかりで夢の実現に向けて活動している。取り組みの背景には「希薄化する地域コミュニティを何とかしたい」という危機感もあった。「子育て」に取り組むことで、希薄化する世代間や地域交流の活性化もなしとげる。そんな一石二鳥の発想を現実化する過程での関係者達の苦勞、工夫とは？



出典)鳥栖市資料

取り組み概要.....

取り組みの目的

次世代を担う子ども達が地域の支援を受けながら夢を叶えるプロセスを経験することによって、充実感、達成感を得るという形で、健やかな成長を支援すると共に、希薄化する世代間交流や地域交流につなげる。

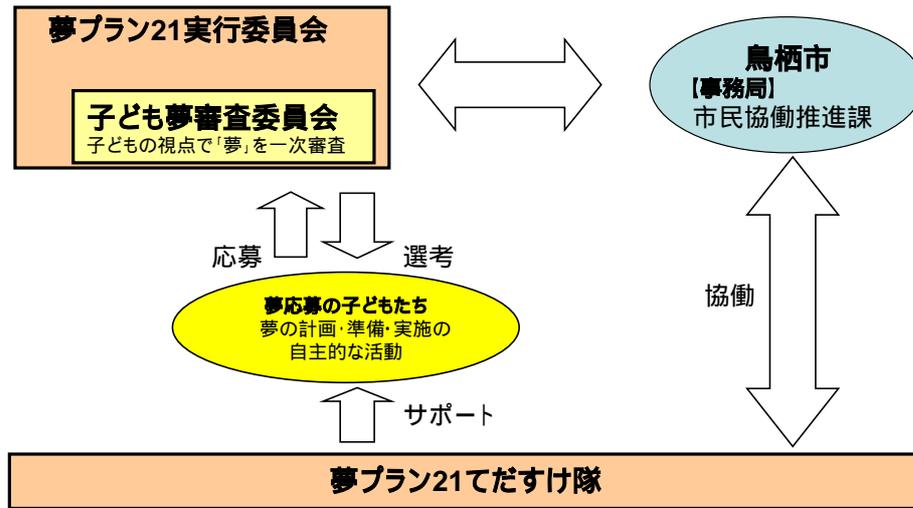
取り組みの内容

市内の小中学生より公募・選定した「夢」を、地域団体や行政のサポートを受けつつ実現する過程で、子ども達の自主性や協調性を育む。

取り組み主体

- ・「夢」に応募する子ども達
- ・夢プラン21実行委員会
- ・夢プラン21てだすけ隊
- ・鳥栖市市民協働推進課

取り組みの体制



取り組みのポイント

1. 行政と地域が一体となった支援体制の構築
 地域団体やNPO等からなる「てだすけ隊」を組織し、子どもの活動を大人が支援する体制を整えている。また行政側も市民協働推進課をはじめとして支援体制を充実させている。
2. 既存の市民活動団体との連携
 これからのまちづくりにおける地域活動の重要性を踏まえ、子ども達の「夢」と、それを的確に支援できる市民活動団体との協働を行政がコーディネートしている。

取り組みによる成果

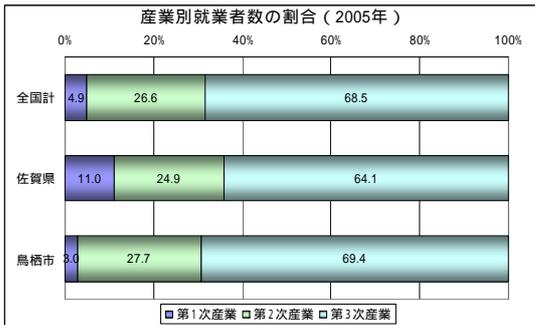
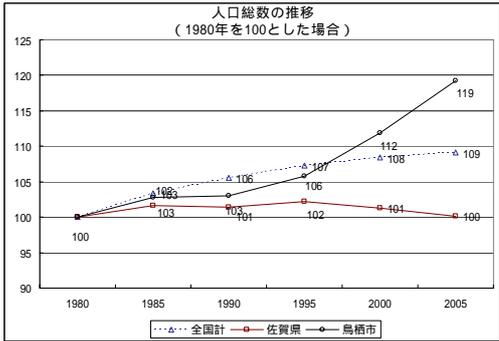
- ・ 5年間で15件の『夢』の実現
- ・ 子ども達の社会に対する意識の変化
- ・ 「継続した地域の取り組み」への発展

今後の展望

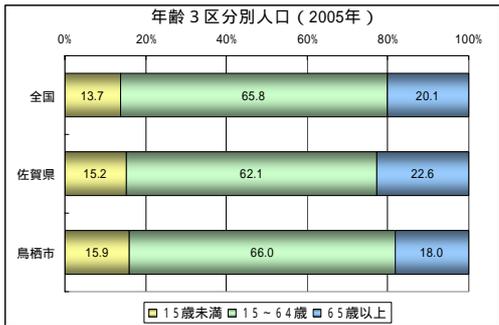
- ・ 引き続き「子どもの『夢』の実現」の継続
- ・ 取り組みにおける地域団体の役割強化



< 鳥栖市へのアクセス >
 東京から
 福岡空港まで飛行機で約2時間
 福岡市から特急で約20分
 大阪から
 新鳥栖駅まで新幹線で約2時間半



出典)総務省統計局: 国勢調査



鳥栖市の概況

人口増が顕著な工業都市

鳥栖市は佐賀県東部の市であり、福岡県との県境に位置している。2005年の国勢調査では人口は64,723人であり、直近の20年間で人口が約1万人増加している。全国や県の傾向と比較しても人口増加傾向が顕著であり、県外へ通勤するサラリーマン世帯の流入が進んだ結果、高齢化率も18.0%と比較的低い。

佐賀県の東端に位置する鳥栖市は、古くから肥前、筑前、筑後の三国が接する要の地にあり、人と物と文化の結節点としての役割を担ってきた。その交流都市としての地位は、今、九州を縦横に結ぶ交通のクロスポイントとして限りない可能性を秘めている。また、近年では大都市部へのアクセス性の高さから、マンション建設が盛んであり、住宅都市としての性格が強くなってきている。

取り組みに至る経緯

「地域の力」の低下に対する危機感

取り組みの検討が始まった2004年前後は、鳥栖市が都市整備に力を入れたことが成功し、市の人口が増えていた時期であったが、それと同時に都市化に伴う地域の課題も顕在化しつつあった。たとえば、転勤等で新しく来た住民が自治会等の地域の組織に入りたがらない地域があるなど、既存の地域コミュニティの希薄化が懸念されていたという。「地域の力」の低下は全国的な傾向としても挙げられるが、特に人口の社会増が著しい鳥栖市においては強い危機感が抱かれたことから、市の総合計画で「市民協働」が基本目標の1つとして掲げられた。

子どもの『夢』の実現支援というアイデア

「夢プラン21事業」の直接のきっかけは、2004年に鳥栖市の市制50周年記念として開催された「こども議会」で示された問題提起である。

「こども議会」とは、市内で在学中の小中学生



鳥栖市はJリーグチーム「サガン鳥栖」のホームタウンであり、町のあちこちでチームのモチーフを見かけることができる。また駅前に立地している「ベストアメニティスタジアム」は、プロ、アマを問わず絶賛されている日本有数のサッカースタジアムである。

出典)鳥栖市資料

鳥栖市の歴史はとても古く、先史時代から人が居住しており、古墳時代には青銅器が生産されていたなど、技術的名先進地域でもあった。鳥栖ジャンクションからほど近くに古墳が残されており、往時を偲ばせる。

出典)鳥栖市資料、鳥栖市観光協会HP

<http://www.tosu-kanko.jp/history.html> (2011/4/4 参照)



の中から代表者を集めて、日頃思っている疑問を直接市長にぶついたり、教育やまちづくりについての議論を交わしたりする場を設けて、市はそこで得られた意見を施策づくりのヒントとする取り組みであるが、市長への提案の中で「自分達の『夢』の実現を鳥栖市も後押ししてくれるような制度がほしい」という趣旨の意見が出されたという。

もともと、街の活性化に子どもの存在は欠かせないとして、当時の市長が青少年育成に意欲的であったこともあり、要望をきっかけとして、子どもの夢を実現させつつ地域の子育て力を向上させるような施策が検討されることになった。市長の特命を受けた市民協働推進課の面々がアイデアの具体化に向けて検討を行った結果、「市が予算を付けた子どもの『夢』を地域の力でサポートして実現させる」という「夢プラン21事業」のかたちが見えてきた。

類似した取り組みがかつて佐賀県で行われていたこともあったが、市レベルでのこうした取り組みは全国でも例がなかったという。

子どもに対する大人の支援のあり方

「夢プラン21事業」で実現する「夢」がどんなものになるかはやってみないと分からないが、ひとつだけはっきりしていたのは、取り組みの成否は、子ども達への支援体制にかかっているということであった。

当時、「子どもの『夢』」に予算をつけることに對して懐疑的な意見も市議会等で出されており、少なくとも予算を市税から捻出する以上、当然『子どもの感覚』でお金を使われるわけにはいかなかった。

鳥栖市では、青少年育成の要素が強い「夢プラン21事業」に市民協働の観点を取り入れ、『大人の目』で実務的なフォローを行う主体として「地域」を位置づけた。

子ども達が自主的に考え、行動するのは大前提であるが、彼らをサポートする過程で希薄化する世代間や地域交流の活性化もなしとげる。これが鳥栖市の描いた事業のあり方である。

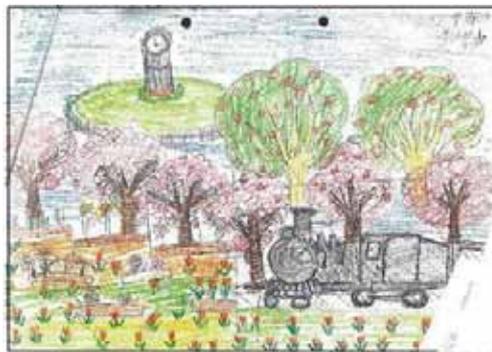
「子ども達を支える大人の組織をきちんと作ることが事業を進めていく上で大事なことです。子どもには『結果も大事だけどプロセスが大事で、夢は簡単には叶わないが、強く願い、努力すると

審査の結果、採用された「夢」に対しては「夢プラン 21 実行委員会」から採用決定通知書が手渡される。

(写真は 2010 年度の交付式の様子)

出典)鳥栖市HP (2011/4/4 参照)

<http://www.city.tosu.lg.jp/1827.htm>



子ども達から寄せられた「夢」の提案の一部。

市内の小学校4年生から中学校3年生までを対象に「夢」を募集している。

初年度には 286 件の応募があり、審査会のメンバーを驚かせた。

出典)鳥栖市資料

必ず叶う』ことを伝えたいので、壁にぶつかっても、できるだけ自分達で解決させるなど、いろいろな経験をさせるために大人はサポート役に徹しています。」と、現在「夢プラン 21 事業」に関わる市民協働推進課の^{しもかわ ゆみ}下川有美氏は語る。

取り組みのスタート

その後、「夢」の実現には地域の協力及び学校の協力などが必要であるとの考え方から、地域で活動する NPO や、短大で官民協働の研究を行う専門家に鳥栖市が働きかけ「夢プラン 21 実行委員会」が立ち上げられ、体制づくりが完了した。実行委員会のメンバーは、子ども達への支援のほか、公募した提案を審査する役割も担っている。無事に市議会の承認も得た夢プラン 21 事業は、2005 年度から実際に動き出すことになる。

「夢」を応募する子どもも初めてなら、選考・審査する委員・事務局側も初めての経験であり、初年度は不安を抱えながらのスタートであった。

実行委員会の立ち上げ時から取り組みに関わり、現在も委員会の会長を務める^{こいしまさあき}小石正明氏は「事前に小中学校の先生にお願いや根回しをしていたわけでもなく、ほとんど応募がないんじゃないかと当時の委員は心配していました。ところ

が蓋を開けたら 286 件もの応募件数があり、「いやあ、どうしよう」と逆に途方に暮れてしまいました。」と語る。

市内の小中学生が出してきた「夢」のアイデアは多岐にわたり、魅力的なものも多く、絞り込みには苦労したが、数回の選考を経たうえで「朝日山でそうめん流し」「鳥栖のCMづくり」などの 5 件のプロジェクトが採用された。

Point マスコミなどでの取り組みの紹介

「子どもの夢を地域で応援し、実現させる」という夢プラン 21 事業の取り組みはマスコミやテレビなどでも取り上げられることが多い。

特に 2006 年に実現した「鳥栖スタジアムを満員にしたい」という Jリーグチームのサガン鳥栖を応援する取り組みはチームのスポンサー企業や地元商店街とうまく協力体制が築けたこともあり、マスコミに大きく取り上げられた。

「夢プラン 21 事業」が全国的に有名になるきっかけとなった取り組みでもあり、翌年度以降は全国各地の自治体から視察希望が殺到したという。



「朝日山でそうめん流し」

2005 年度に採用された「夢」のうちのひとつ。鳥栖市を一望できる朝日山の山頂から約 300メートル離れた広場までそうめん流しを行うという驚きのプロジェクトで、発案者は鳥栖北小学校の子どもである。お披露目の日には約 600 人の人が訪れ、そうめんを味わったという。

出典)鳥栖市資料



現在の取り組み

子どもの自主性・協調性を育む夢プラン 21

ともすれば「小中学生の『夢』に予算をつけて実現化する」というキャッチーな側面に着目されがちな夢プラン 21 事業であるが、本来の目的は地域との関わりの中で子ども達が自主性、協調性を身につけることにある。

取り組みのなかで子どもに期待される役割としては、「夢」を実現する過程で社会との関わりを深め、充実感や達成感を得るとともに自主性、協調性を育成することが挙げられている。

「夢」の選定は夢プラン 21 実行委員会の面々が複数回かけて行う。選定の視点として「やる気」「関わることが出来る人数の多さ」「計画性」といった点が重視されるという。

「てだすけ隊」による子どもの支援の仕組み

既に述べたように、夢プラン 21 事業の目的として、子ども達への協力を通じて地域の活動全体を活性化しようという意図もあった。

取り組み初年度こそ、夢プラン 21 実行委員会が子どもの「夢」のサポートも担っていたが、委

員が業務を丸抱えすると負担が大きいことや、取り組みに参加するメンバーの固定化、世代間交流の実現、協働型での事業展開、子ども達の充実感や達成感による自主性・協調性の育成、地域の協力者に対する感謝の気持ちなどを実感させるために試行錯誤の末、「てだすけ隊」と名付けられる子どもの夢の支援者を、年度ごと、プロジェクトごとに募り、サポート活動を行っている。

てだすけ隊の構成員は各種団体や個人からそれぞれ選任され、その年ごとに異なるのが特徴だ。同じ人が継続的に関わり続けるよりも、多様な子どもの「夢」を実現するために、適材適所で協力を仰ぐほうが理にかなっていると判断された結果である。

事例紹介 大きな凧をあげたい！ ～2006年度の「夢」より～

(1)「大きな凧をあげてみたい」

「大きな凧をあげたい！」は、2006年度に夢プラン21で実現した3つのプロジェクトのうちの1件である。発案者は鳥栖北小学校の4年生(当時)だった古賀比奈子さん。ちょうどその年のお正月にテレビで凧あげ名人の番組を見たことが印象に残っており、「みんなで大きな凧あげをできたら楽しいだろうな」と考えて応募したという。

出した提案について、夢プラン21実行委員会の委員の前でプレゼンするときに緊張してしまっただが、無事に81件の応募のなかから採用された。大凧づくりには古賀さんを始めとする、鳥栖北小学校のクラスの仲間12人が中心になって取り組んだ。

また鳥栖市在住の凧づくり名人の高尾平良氏たかおひらよしをはじめ子どもの頃にした凧あげを懐かしむてだすけ隊の面々が凧づくりのサポートを行った。



出典)鳥栖市資料



「夢」の発案者
古賀比奈子さん



当時鳥栖北小学校の4年生だった「大きな凧をつくりたい」発案者の古賀さんは、現在は中学2年生。家族の勧めで「夢プラン21」に応募した。

「やり直しが多くて大変だったけど、昔の遊びに触れられて良かったです」

Q. 取り組みではどんな凧をつくったのですか？

参加した12人が3人ずつ分かれて、4機の凧をつくりました。「にこにこハッピースマイル」とか「虹のケンタウロス」とか、名前やデザインにもこだわっています。自分達の身長よりも大きい凧だったので凧揚げの当日には、大人も子どもも一緒になって引っ張って走りました。1年がかりで作った凧が上がった時はとてもうれしかったです。

Q. 一年間取り組んでみた感想は？

大きな凧はもちろんですが、それまで普通の凧をあげて遊んだこともなかったなので、全部が興味津々で楽しかったです。作った凧が重くて飛ばず、作り直しをしたり大変なところもあったけど、普段は大人の人と一緒に作業したりすることがないので新鮮でした。いつか自分が手伝いのできる年になったら協力してみたいと思います。

(2)採用から凧づくりまで

8月の一番暑い時期に、山から竹を切り出し、竹材を焙って油抜きをする骨組みづくりの作業が行われた。山に生えている真竹を1.5m程度の長さに切り出し、薄く削るという熟練の技がある作業であるが、普段小刀など握ったことのないような子ども達も夢中になって作業した。中には、余った竹材で弁当用の箸を作り上げてしまった子もいたという。

その後、凧に張る和紙に絵を描いたり、あがりやすいようにさらなる軽量化に努めたりと、凧あげ当日に向けて着々と準備は進んでいった。



出典)鳥栖市資料

(3) 凧揚げ当日

取り組みのクライマックスである大凧のお披露目・凧揚げ大会は、凧揚げにふさわしくお正月の時期（2007年1月8日）に開催された。

当日は天候に恵まれず、風も弱いことからうまく凧があがらないまま閉会式を迎えたが、みんなが解散しようというその時になっていい風が吹き出した。チャンスを逃すまいと子どもも大人も一緒になって懸命に凧の紐をもって走った結果、200名ほどのギャラリーが見守るなか、上空80mまで大凧はあがり、会場は大歓声に包まれた。そこまでの高度には事前のリハーサルでも達したことがなく、子ども達の顔は達成感に満ち溢れていた。



出典)鳥栖市資料

会場は大歓声に包まれた。そこまでの高度には事前のリハーサルでも達したことがなく、子ども達の顔は達成感に満ち溢れていた。

(4) その後の展開～地域の行事への発展～

本編でも既述したように、「夢」を達成したあと、基本的には行政が活動を引き継いだりはしない。しかし凧あげの取り組みは、てだすけ隊の1人が、凧あげの会場となった新興住宅地である弥生が丘地区の住民で、新旧住民を融合させるためのイベントの一つとして引き続き取り組まれている。今後も、夢プラン21で培った凧あげのノウハウを活用して地元で根付くような事業が、子ども達の夢を実現する事業をきっかけに生まれてくれれば良いと願っている。



あるふぁ企画

たかおひらよし
高尾平良 氏



「凧揚げ名人」としててだすけ隊に参加した高尾氏は郷土史に精通しており、「国内最古の凧の記述は鳥栖にある」と語る。竹細工から竪穴式住居の復元まで多彩にこなす。

「子どもは自分で工夫するから面白い」

Q. 凧づくりに協力された時のことを教えてください。

子ども達には凧の歴史から手ほどきしましたが、聞いてみるとだれ一人凧揚げした経験がないということで、最初は普通サイズの凧を作らせて一緒に揚げに行きました。今の子どもは山に行って遊んだり、ナイフを使ってものを作ったりする機会がなくなりましたが、さわりの部分さえ教れば、子どもは自分で工夫していくから一緒に活動していて面白いですね。

Q. 凧の設計をされた時の苦労、工夫された点について教えてください。

これまでいろいろな凧を作ってきましたが大凧は初めてだったので、今回凧の設計にあたって、色々研究しました。最初は大人だけで、3畳分の大きさの凧を作ったら、揚がるには揚がったけれど、出来がいまいちだったから、設計し直して2畳分のサイズへ変更しました。バランスをとるための足とか、凧を支えるロープとか他では見られない凧に仕上がったと思います。



出典)鳥栖市資料



夢プラン 21 実行委員会 会長

こいしまさあき
小石正明 氏

鳥栖市市民協働推進課

しもかわゆみ
下川有美 氏



桜町の区長も務めている小石氏は取り組み当初から関わっており、「夢プラン 21 事業」を積極的に作り上げたメンバーのひとりである。市民協働推進課の下川氏は、子どもへのヒアリングから全体の進捗管理まで担う事務局として取り組みに関わっている。

「最初は『夢』の審査に苦労しました」

Q. 取り組みが始まったときのことを教えてください。

(小石) 夢プラン 21 事業については立ち上げのときから関わっています。それまでに行っていた青少年健全育成事業と少し内容は異なりますが、当時の市長さんが積極的に取り組んでくださって実現しました。初年度には本当に子どもが応募してくるのか委員の皆も不安に思っていたところがありますが、300 件近い応募があってホッとすると同時に選考が大変でした。やはり委員それぞれに思い入れがあって、なかなか満場一致では決められなかったと記憶しています。

Q. 次年度以降も取り組みを続けておられるとのことですが。

(下川)「夢」は子どもから上がってくる段階では、あいまいなものが多いので、ある程度選考が進んだ段階で聞き取り調査をして肉付けをしていくこととなります。子どもの方も、話しているうちにだんだんイメージが具体化して夢が膨らんでいくので、予算との調整などが大変だったりします。

Q. 6 年目を迎えて取り組みの雰囲気の変化は？

(小石)「夢」の選考条件の一つとして「これまでの夢プラン 21 で実現されていないもの」というのがあります。今年で 6 年目の取り組みになるので、いわゆる奇想天外な「夢」もひと

おり出てきたかなという印象はあります。初年度には朝日山でのそうめん流しが採用されましたが、その後、食品を扱うのは安全衛生上リスクが大きいとの指摘をいただいたので次年度以降は食べ物からみの取り組みは行っていません。本当はあまり制約が多いと似たような取り組みの繰り返しになりかねないのですが難しいところですね。



出典)鳥栖市資料

「秘密基地をつくりたい」
みんなが楽しめる工夫のたくさんつまった秘密基地を、大きな木の上につくりたいという「夢」の実現。鳥栖北小学校と若葉小学校の子ども達が協力して2006年度に実現させた。

「リサイクル・イルミネーションをしたい」
2009年度に基里小学校の子ども達が実現した「夢」。約8000本近いペットボトルを集めて、オブジェや平和への願いを込めたパネルを製作し、お披露目した。てだすけ隊である商工会議所青年部が毎年行っているライトアップのイベントと、うまく協力できた事例である。



出典)鳥栖市資料

取り組みのポイント

行政と地域が一体となった支援体制の構築

「青少年健全育成事業」の一環として位置づけられている「夢プラン21事業」であるが、これまで紹介したように、行政だけではなく、地域団体が中心になって子ども達の活動を支援していることが取り組みのポイントとして大きい。

また、小中学校に通う子ども達から「夢」を募るといった事業の性質上、学校のクラスの仲間で「夢」の実現に取り組む子どもが多いこともあり、学校の先生との協力体制が鍵になることも多いという。また、てだすけ隊の主要な担い手としてPTAが位置づけられることも少なくない。

いずれの場合も、市民協働推進課をはじめとする鳥栖市役所のしっかりした支援体制が伴うことはいままでのない。全体の窓口は市民協働推進課が担当するものの、プロジェクトによっては他の部局も巻き込むこともある。

既存の市民活動団体との連携

夢プラン21事業では「山の頂上からそうめん流し」「秘密基地をつくる」といった「夢」の実現そのものよりも、子ども達が周りからサポートされながら、試行錯誤のうえで夢を実現させるというプロセスのほうが重要だと位置づけられている。

それ故に、取り組みを支える「てだすけ隊」の確保はプロジェクト自体がスタートできるか否かの最重要ポイントといっても過言ではないが、一方で、「てだすけ隊」には、プロジェクトに応じた専門知識が求められるというジレンマがある。

そういったなか、鳥栖市で取り組みをスムーズに進められているポイントの一つとして、地域の市民活動団体と上手に連携し、子ども達の「夢」をリンクさせていることが挙げられる。

たとえば、「大きな凧をあげたい」という「夢」では、地域の凧あげ名人にてだすけ隊として参加してもらったり、「川に魚を放流して自然公園を増やしたい」という「夢」では、環境保全団体

「ヤマメ会」の活動に参加させてもらったりするなどの工夫をしている。また、2009年度に実施された「リサイクル・イルミネーションをしたい」のように、商工会議所青年部が毎年クリスマスの時期に行っているライトアップのイベントと、うまく協力しながら取り組みを進められたケース

もある。

市民協働推進課は子ども達の「夢」に応じて、てだすけ隊になりうる市民活動団体とのマッチングも行う。地域活動が根付きつつあり、なおかつ行政と地域団体が良好な関係を保っている鳥栖市だからこそそのポイントといえるだろう。



基里公民館
さだいさとし
佐田功利 氏



現在基里公民館に勤める佐田氏は、2006年度の「大きな凧をあげたい」「秘密基地をつくりたい」にてだすけ隊として参加。地域の活動に積極的に関わることになったのは鳥栖市に引っ越して以降だが、現在では様々な活動の企画や予算確保に関わるキーパーソンとして活躍している。

「新しい町だからこそ『交流』が重要」

Q. てだすけ隊に参加された時のことを教えてください。

もともと情報機器メーカーの福岡支社で働いていましたが、8年ほど前に鳥栖市に引っ越してきました。こちらに来てしばらくして「かいろう基山」というNPOに所属するようになり、市内の地域活動団体の連絡会に出席していたときに誘われたのがてだすけ隊に参加したきっかけです。

凧づくりに使う竹を切るとき、子ども達は皆初めてで戸惑いもあったみたいですが、とても興味を持ってくれました。大人が簡単そうに竹を切るのを見て真似して、転んで泣いちゃったりする子もいましたね、怪我がなくてよかったです。

Q. 次年度以降も取り組みを続けておられるとのことですが。

私が住んでいる弥生が丘地区は人口が増えており、取り組みの翌年度に新しい小学校区ができるのに合わせたイベントとして凧あげを続けることになりました。子ども達にはとても評判が良くてそれ以後毎年続いています。今は自治会の活動なので高尾さんに声かけしていませんが、ゆくゆくは「地区の凧あげ大会」から「鳥栖市の凧あげ大会」へと発展させたいと考えているので、また高尾さんにも協力してほしいと思っています。

Q. その他に地域活動としてされていることは？

弥生が丘地区は、ここ5年間で人口が900人から2200人まで急増し

ています。新しく来た人と古くから住んでいる人が混在しており、新旧住民の交流の重要性を実感しています。他の地区では新しく来た人が地域の行事に関心を示さなかったりもするようですが、私の地区では新住民側も新しい町だという自覚があるので「今やらないと何も無い町になってしまう」という危機感があるようです。

現在、主に取り組んでいる活動としては「花いっぱい運動」として住宅地の歩道にプランターを置く活動を行ったりしています。町の美観向上だけでなく、子どもの道路への飛び出しを防ぐ役割も兼ねています。最近の歩道は段差が無くて良いのですが、かえって危なっかしいこともありますからね。他にも地域活動のための補助金をいろいろ活用して活動を行っています。



「鳥栖スタジアムを満員にしたい」

2006年度に鳥栖北小学校の子ども達が実現した「夢」。まだ一度も満員になったところを見たことがない鳥栖スタジアム(現ベストアメニティスタジアム)をお客さんでいっぱいにするを目標し、てだすけ隊と協力しながら県内の企業や学校、報道機関へアピールした。

当日は約18,000人を越える入場者数を記録し、立ち見が出るほどの盛況ぶりであった。

出典)鳥栖市資料

取り組みの成果

「継続した地域の取り組み」への発展

5年間で15件の『夢』の実現

今回紹介した「夢プラン21事業」は、行政の事業であるという性質上、原則的には単年度で各プロジェクトは終了することになる。どんなに評判が良くても、原則的に行政が翌年度以降も事業を引き取って続けることはない。しかし最近ではその年の取り組みが終わった後も「てだすけ隊」が中心になって活動を続けるケースが増えてきているという。

取り組みが始まった2005年度以来、子どもの「夢」を公募し、地域の大人が支援するという基本的なスタイルは変わっていない。2009年度までの5年間で15件のプロジェクトが選定され、実現している。

「大きな凧をあげたい」という子どもの「夢」がその後も地域のイベントとして定着しつつあるのは前頁で紹介した通りであるし、「鳥栖スタジアムを満員にしたい」という「夢」にてだすけ隊として協力した民間企業は、その後も毎年ファン交流デーを設けるという形で取り組みを継続させている。

子ども達の夢の「質」の変化

取り組みが6年目を迎え、子ども達が提案してくる夢の質も変化しつつあるという。「子ども達が応募してくる『夢』は、かつては『お菓子の家をつくりたい』といった個人の夢を出してくる子が多かったが、最近では『川に魚を放流して自然公園を増やしたい』『フラワーロードを作って地球温暖化防止に協力したい』など、環境をテーマにした取り組みなどが選ばれる傾向にある。2010年度現在進行中のプロジェクトは、九州新幹線新鳥栖駅開業を祝う「案内図」「お祝いの企画」「タイルアート」の3つの夢が進行中である。「夢プラン21事業」は子ども達が社会問題に対して関心を持つきっかけのひとつになっているといえるだろう。

今後の展望

子ども達に取り組みの担い手として活躍してほしい

これまでに「夢」を実現させた子ども達自身が翌年度以降も活動に関わっているケースは今のところないが、「子ども夢審査委員」として提案を審査する側で参加することもあるという。将来的には、取り組みに参加した子どもが成長し、「夢プラン 21 事業」のサポートをしてくれるようになってほしい、さらには夢プランの活動で得たことを何らかのかたちで社会や地域へ還元してほしいというのが関係者の願いだ。

予算が縮減されるなかでの取り組みの展開

市民協働の観点を取り入れた青少年健全育成事業の成功事例として有名になり、全国の自治体から視察希望が絶えない「夢プラン 21 事業」であるが、予算規模は年々縮小傾向にある。

初年度は5件選定された子ども達の「夢」の件数もそれに伴って少なくなっており、2008年度の選定件数は1件、2009年度は3件であった。

そうした中での、今後の事業展開について下川氏は「現在鳥栖市では2011年度を目途に小学校区単位で地域自治組織を立ち上げているところです。鳥栖市でも「夢プラン 21 事業」は継続しますが、長期的には地域の活動へシフトさせるという可能性の一つだと考えています。地域がより主体的に関わることで継続性の高い取り組みが増えることも期待できるのではないのでしょうか」と語る。

取り組み主体としての地域団体の成熟にもなって「夢プラン 21 事業」の枠組みも少しずつ変わりつつある。

Point 「子ども夢審査委員会」における「夢」の審査

上述したように、子ども達から募集した「夢」は夢プラン 21 実行委員会の面々が協議して選考を行う。2008年度からは「子どもの夢を審査するのだから子どもの視点を取り入れるべきでは」との意見が出され、鳥栖市内の小中学校から「子ども夢審査委員会」の委員が選出され、「夢」の審査に加わり、提案書の一次審査を行っている。

最終的には夢プラン 21 実行委員会が「積極性」「協働性」「実現性」の3点において判断することになるが、これまでのところ、順位の入替わりなどはあっても両者の審査結果に大きな違いはないという。

審査会では他校を代表してきた生徒と同じテーブルに着くことになるため、普段はなかなか他校と交わる機会の少ない彼らにとっても、良い経験になっているということである。